

においては怖れは全くないはずである。このように仏教教育に付随する議論を整理していく中で、現在わが国に求められる仏教教育として、宗教的情操教育Ⅱ「いのちの教育」と並ぶ形の、仏教における宗教的情操教育Ⅱ「仏性の教育」を提案する。如来蔵思想の人間観を象徴する人物には『華嚴経』の善財童子、『法華経』の常不軽菩薩、『勝鬘経』の勝鬘夫人が挙げられる。

三 仏教における宗教的情操教育Ⅱ「仏性の教育」

ここまでの議論を整理すると、まず仏教教育の教化的性格よりも教育的性格こそが現代の教育に活かすには相応しいこと、次に「人格の完成（覚者の完成）」を目的とする点で仏教と教育には共通性があるものの、（道徳）教育には限界があり、宗教に負う面があること、そしてここではその追う面としていくつかあるうちの宗教的情操教育に着目するということである。さらに宗教的情操教育と言っても、宗教の教化的性格を強調するものではなく慈愛的なものであり、人間をそのまま肯定するものではなく如来蔵思想で言うところの如来蔵（仏性）を肯定する教育である。それは宗教的情操教育Ⅱ「いのちの教育」という図式を借りるならば、仏教における宗教的情操教育Ⅱ「仏性の教育」という図式であり、如来蔵思想（仏性思想）を理論的基盤とするものである。

パネルの主旨とまとめ

西尾 秀生

宗教が社会に貢献しうる可能性について考えることは有意義であろう。政教分離が建前の現在の日本では公立学校で宗教教

育を行うことは難しいが、かつては寺が教育の重要な役割を果たしてきた。今回のパネルはアジアの宗教が社会で果たしうる可能性を探る目的で企画した。ここでの「教育」は広い意味に解釈し、「教化」の意味も含めることにする。

第一発表者の龍口明生氏は律蔵研究の立場から、「戒律規定と沙弥教育」というテーマで沙弥への教育について発表した。沙弥となるには、不殺生・不盗・不淫・不妄語・不飲酒・不著華香・不觀聽歌舞作樂・不坐臥高廣床上・不過時食・不得捉金銀及錢の十戒を受けねばならない。沙弥の師の資格は「十法成就」であり、出家して法臘十年以上であり、且つ持戒者であり、論や律について多聞であり、戒定慧を学ぶ等の条件を具えた者でなくてはならないと制定されている。沙弥を教育するということは、当の沙弥自身の資質が問われねばならないが、それ以上に和上の能力が厳しく規定されているのである。この戒律規定を現在の学校教育に当てはめると、教育者の資質が問われるのは当然のことであろう。

第二発表者の北川清仁氏は近代インド思想研究の立場から、「オーロピンドの教育論」というテーマで、宗教が教育にかかわる利点や問題点を問う発表であった。オーロピンド・アシラムの学校教育は三原則を基本とし、さらに感覚の訓練、知性の訓練、肉体の鍛錬、モラルの教育の四部門からなる。モラルや情操教育を欠く知育は有害であり、モラルと宗教の教育をまったく無視すれば民族を墮落させるという。またその上に靈性の教育がある。これは学校の範囲を超え生涯にわたる。オーロピンドの思想から、人生には聖なる目的があるという立場であ

る。このオーロピンド・アシュラムの学校と比べると、日本の仏教団の学校教育は仏教の理念を充分に生かし切れていない嫌がある。

第三発表者の宮井里佳氏は『金蔵論』研究の立場から、「中国仏教の唱導」を発表した。仏教教育は「法会」の場で一般の人々に行われてきた。法会の中に「唱導」という説教形式があり、人々に仏法をわかりやすく説いて教え導いた。道紀撰の『金蔵論』は、因縁譚をテーマごとに収録した仏教の要文集であり、説法の種本として用いられた。ここに説かれる因果応報とは、仏法を迫害すれば悪果が顕れ、仏法を護持すれば、善果が顕れるということである。善因善果・悪因悪果の物語は、善行への志向を高め、社会の安定のために有益であろう。しかしながら、説かれる善果が世俗的な価値観や地位と結びつくことは、既存の社会の悪い意味での維持につながる。また、善悪が仏教を信ずるか否かの観点で説かれることは、仏教護持のためのものであったことを意味するであろう。

第四発表者の岩瀬真寿美氏は教育学の立場から、「日本の仏教教育」というテーマで仏教教育の人間形成的意義を考察した。インドの大乗仏教で衆生が如来になるべき因として如来蔵が説かれた。この思想は仏性に繋がるものであり、宗教的情操教育に生かすことができる。人格の完成（覚者の完成）を目的とする点で仏教と教育には共通性があるものの、（道徳）教育には限界があり、宗教に負う面がある。宗教的情操教育は宗教の教化的性格を強調するものではなく慈愛的なものであり、人間をそのまま肯定するものではなく如来蔵（仏性）を肯定する

教育である。このように仏教における宗教的情操教育は如来蔵思想による人間形成の可能性を探ることができる。

今回のパネルでは、フロアから多くの質問があり、発表者とフロアとの間で活発に議論できた。そのため、教育の現代的な意義だけでなく、仏教及びヒンドゥー教の思想を宗教教育に生かす今後の可能性を一緒に考えることができたことは有意義であった。

日本人の宗教性を問う

—— 欧・米・韓・日の宗教事情を通して ——

代表者・司会 藤 能成
コメンテータ 原田哲了

韓国の宗教事情と日本人の宗教性

藤 能成

日本の宗教学・社会学の研究者が「日本は非宗教的社会である」と見ている通り、日本人の生き方は、一般に世俗化されており、物質主義にもとづく自己中心的、欲望追求的生き方をする人が多く、宗教に対する社会的評価も低い。多くの人々が、非宗教的、物質主義的生き方により、孤独・虚無感・死への恐怖等の精神的苦悩に苛まれている現実がある。しかし一方で、日本を訪れる韓国や西欧の人々や研究者から、その宗教性を高